

国際学会（Obesity week 2013）活動報告書

1. 概要

世界各国で増加し続けている肥満症は、糖尿病、脂質異常症、高血圧、動脈硬化症など様々な疾患の発症の原因となり、国際的に解決しなければならない社会的に重要な課題である。日本の肥満症研究はこれまで世界をリードしてきたが、欧米の肥満症は病態や肥満度が異なり、対策も多様である。Obesity week は主に米国の肥満症治療に関する様々な分野が一堂に会する国際学会である。

2. 開催概要

学会名：Obesity week 2013 (The obesity society annual meeting program)

開催日時：平成 25 年 11 月 13 日（水）～16 日（土）

開催場所：Georgia World Congress Center, Atlanta, GA, USA

3. 発表者および発表内容

○Kaito Iwayama, Park Insong, Ryosuke Kawabuchi, Reiko Kurihara, Masashi Kobayashi, Masanobu Hibi, Sachiko Yamaguchi, Yoshiharu Nabekura, Hitomi Ogata, Naomi Omi, Kumpei Tokuyama.

「Timing of exercise relative to meal ingestion affects 24 hours fat oxidation.」

米国の肥満者は、日本ではあまり見られない「BMI>40」といった深刻な肥満である場合が少なくない。そのような肥満者の治療として「Gastric bypass」など手術が適用される症例が多いため、発表演題は手術に関するものが多かった。その中で本研究発表は数少ないと言っても過言ではない「運動療法」につながる内容であったため、多くの人の関心を集めた。今回の発表では脂質酸化を増大させる「現象面」の発表であったため、その機序について多くの議論をする機会となり、今後の研究につながる良い経験となった。

学会全体を通して感じたこともあった。学会のセッションには、肥満者が増加している背景に社会的な問題が多々あるといった点を論じるシンポジウムなどがあり、米国のファストフード店を含めた外食産業への問題提起もなされていた。その際に日本食を引き合いに出した比較などが行われており、改めて世界が日本食の良さを認識していることを実感した。日本人の食の欧米化が指摘されてずいぶん経つが、私たち日本人自身が日本食の良さをもう一度認識していく必要があると感じ、日本食の文化をすたれさせないような努力が必要だと感じる機会となった。